

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520114

研究課題名（和文） ルネサンスにおける奇蹟像の地位をめぐる歴史人類学的研究

研究課題名（英文） A Historical-Anthropological Study on the status of Renaissance Miracle Images

研究代表者

水野 千依（MIZUNO CHIYORI）

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：40330055

研究成果の概要（和文）：本研究では、奇蹟により特別の崇敬を集めたキリスト教聖像に着目し、ルネサンス文化における像の地位や機能について考察した。具体的には、トスカナ地方で流行した聖母像崇敬の地理的変遷と像の地位をめぐる論理の分析、奇蹟像の修復と複製についての調査、そして奇蹟像崇敬を促進した人々の社会層や心性をめぐる考察という三つのケース・スタディにより、芸術的価値に終始しないイメージのあり方を理解する視座を得るとともに、歴史人類学的アプローチの可能性を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：In this research program, I considered the status and the function of images in Renaissance culture, by giving attention to the Christian miraculous cult images. Concretely I tried to make three case studies : 1) an analysis of the geographic changes of the worship of Madonna images and their logics, 2) a research on the restoration and copy-making of miraculous images, 3) a consideration of the social status and mentality of those who promoted these worships. Through these studies, I could find some points of view to understand various functions of images without limiting the artistic value, and indicate future possibilities of historical-anthropological approaches to the image culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：歴史人類学、イメージ人類学、美術史、奇蹟像、ルネサンス、聖像・偶像

1. 研究開始当初の背景

従来美術史学においては、数々の巨匠や傑作に彩られたルネサンス美術を語るに際して、その芸術的革新の究明に焦点が当てられ、様式論や図像学の立場から作家論や作品論が主に展開されてきた。それに対して研究

代表者は、ヴェネツィア出身の画家ロレンツォ・ロット（1480-1556/57）の研究（「科学研究費 若手研究（B）平成 14—16 年度 研究課題「ルネサンスの家庭生活におけるイメージの位相研究——ロレンツォ・ロットの芸術を例に」、研究代表者：水野、研究課題番

号：14710032) や、ルネサンスのイメージ文化の基層に残る古代異教の慣習や民間伝承の痕跡をめぐる研究（「科学研究費 基盤研究(C)」平成17-20年度 研究課題「イタリア・ルネサンスにおける古代異教的慣習の残存をめぐる歴史人類学的研究」、研究代表者：水野、研究課題番号：17520096）を進めるなかで、美的洗練を追究する芸術的次元に加え、近代以降の美術史学がともすれば看過してきた次元——像に力や息吹を認める物神崇拜とも踵を接する領域や、古来の像魔術に類した現象など、イメージの礼拝的価値・呪術的価値・行為遂行的価値——に注目することの重要性を認識し、イメージが制作され受容された文化的・宗教的・社会的なコンテキストのなかで、それらが担った地位や機能を明らかにしようと考えた。中世末から近世初頭にかけての文化変容のなかで、像をめぐるさまざまな態度はいかに矛盾や対立を孕みつつ共存し変化したのか、その複雑なあり様に光を当てること、この時代におけるイメージの力とその受容を歴史人類学的視座から問い直すことを課題と認識するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、特別な崇敬を受けた奇跡像に着目することで、ルネサンス文化におけるイメージの地位や機能を歴史人類学的観点から問い直すことを目的とした。

中世宗教美術史学の碩学にして奇跡像研究の泰斗ハンス・ベルティンクが、その浩瀚な『像と儀礼』のなかで提示した名高い定義、「芸術上の革新とともに中世的な礼拝像に弔いの鐘が鳴らされた」にみるとおり、ルネサンスといえば、一般には「芸術の時代」と理解されている。

しかし本研究では、イメージへの美的な新しい態度や芸術的価値の台頭とともに、従来の礼拝価値がいかに変容を被りつつ新たな崇敬像の歴史を息づかせていったかを分析し、合わせて当時の芸術的価値のあり様自体も再考することで、この一般的な見解に修正を迫るものである。

3. 研究の方法

研究の方法としては、近年、「歴史人類学」、あるいは「イメージ人類学」と称されている学際的研究と少なからず共振する方向性を探ってきた。1970年代以降、西欧社会の価値体系や組織形態の相対性が認識されるにつれて、歴史学では、民族学やフォークロア研究、社会人類学や文化人類学のアプローチを参照しようとする傾向が高まり、それらとの対話に立脚する「歴史人類学」と称される新たな方法論が模索されてきた。同じ時期、美術史学においても、素朴な実証主義や歴史主

義に疑義をはさみ、「中立で透明な主体」、「自律的な作品」という「近代」的な認識図式や西洋中心主義的な価値観を反省し、隣接諸学との領域横断的な対話により方法論的反省を自らに課す動きがみられはじめた。その流れのなかで、狭義の「芸術」という概念を越えて、さまざまな文化におけるイメージ一般の価値や機能をとらえ直すイメージ人類学的研究が萌してきた。デイヴィッド・フリードバークの『イメージの力』（1989年）や、ハンス・ベルティンク『イメージ人類学』（2001年）をはじめ、近年、アビ・ヴァールブルクやユリウス・フォン・シュロッサーの知的遺産を再評価する流れのなかで、こうした傾向は高まりつつある。また、非知（Non-savoir）へのまなざし、アナクロニズムの復権、歴史の無意識＝「残存（Nachleben）」といった概念を通じて、ヴァールブルクの「名前のない科学」の継承を訴えるジョルジュ・ディディ＝ユベルマンのイメージ人類学も示唆に富むものであり、研究代表者はその翻訳にもかつて携わってきた。

こうした研究手法が美術史研究にいかにか積極的に貢献をなしうるかという方法論的関心のもと、奇跡を起こす礼拝像をめぐる、海外での作品・文献調査を中心に、以下、三つのケース・スタディを試みた。

4. 研究成果

事例研究ごとに成果を記す。

(1) まず、中世末から近世初頭にトスカーナ地方で流行した聖母像崇敬に目を向けた。当時、自然災害や政治的・経済的危機を前に聖母に救いを求める人々の声が高まったが、それと同時に、聖母像が奇跡を起こすという現象が広範に記録されるようになる。本来、ルッカのヴォルト・サント（木製十字架像）以外に由緒正しき聖像を所有していなかったトスカーナ地方にとって、「真正な」イメージの獲得は急務であった。「アケイロポイエトス（人の手によらざるイメージ）」の伝説をもつ礼拝像を擁するローマに対して、トスカーナはいかにして自分たちのイメージを「真正な」地位にまで高めえたのか。その具体的な経緯を、すぐれて崇敬を集めた聖母像を中心に考察した。

チーゴリからラストラ・ア・シーニャ、次いでインブルネータ、フィエゾレ、そしてフィレンツェ市内のオルサンミケーレからサンティッシマ・アヌンツィアータ、グラーツィエ橋へと、田園地方から都市中心部へと崇敬像の流行が地理的に変遷していく経緯を追い、各事例において、像の地位を操作する論理や経緯がいかなるものであったのかを現地での作品調査および資料分析、聖像にまつわる伝承の解説などを通じて考察した。

その結果、聖地と縁の深い真正な聖像を所

有するローマに対して、トスカーナ地方の聖像崇敬がいかに移り変わりやすい現象であったか、さらに像崇敬をプロモートする集団も多様であり、像の地位を根拠づける操作も、像の自発的奇跡力に訴えるものから、他の聖像の奇跡譚のバスティッシュに訴えるもの、さらにはキリスト教以前の異教の崇拜からの継承性を唱えるものなど、多岐にわたることが明らかとなった。

さらに、国際的な見取り図を視野に入れるなら、西欧キリスト教徒による十字軍がコンスタンティノポリスを征服しラテン帝国を建立した1204年前後、さらにオスマン・トルコ軍によって首都が陥落しビザンティン帝国が滅亡する1453年前後を主に契機として、帝国に保管されてきた東方の聖遺物やアイコンが西方に流入するなか、西方で高まった初期キリスト教リヴァイヴァルとの関連にも導かれることとなった。そこでは、古いものだけでなく同時代の像であっても、東方に由来するイメージならなんでもあり、いわば「他者の時間」を内包したタイム・カプセルさながら「古さ」や「真正性」が認められた。それと並行して、西欧の聖像自体を再活性化し権威づけ直す傾向も高揚し、礼拝像の聖性や奇跡をめぐる古今東西のさまざまな伝承の糸をたぐり寄せ、伝説を構築し、喧伝するという現象がみられた。この時期にトスカーナ地方で、何度か聖像譚が書き換えられたり、別の聖像の由来を流用したりするなどの現象が観察されたのは、こうした流れと連動させて理解する必要があることを再確認した。

これらの成果は、博士論文および著書の一部として公表した。

(2) 奇跡像の修復と複製制作の問題については、研究代表者はすでに、科学技術と歴史主義に裏打ちされた近代の修復とは異なり、古い奇跡像に対するルネサンス期の修復的処理が像の力の活性化と密接に関係したものであったことを、額縁の交換、重ね塗り、置き換え、図像の変更、再コンテキスト化などの事例を検証することで明らかにしてきた（「科学研究費 基盤研究(B)」平成15-18年度 研究課題「イタリアにおける美術作品の保存・修復の思想と歴史—欧米各国との比較から—」研究代表者：岡田温司、研究課題番号：15401007）。

具体的には、ローマでは、「アケイロポイエトス」の権威をそなえた崇敬像に対して、手を加えることなく、人々の視線から遠ざけることでいわば聖遺物化し、「複製」で代用するという、東方ビザンティンの聖像論をふまえた所作が見られた。その結果、数多くの複製が出回ることによって、オリジナルの像以上に新たな複製が人々の崇敬を集めるといった逆転現象も観察された。それに対して、由緒正しい真正な像をもたないトスカーナ地方で

は、礼拝像の権威を保持するために「加筆」や別の像への「置換」、あるいは別の像のなかに古い像を組み込む「再コンテキスト化」という論理が働いたことが推測された。さらに、15世紀以降の芸術様式や造形表現の歴史性に対する意識の高まりに応じて、古びた様式に超越的でヒエラティックな意味を見る態度も観察された。

また、トスカーナ地方だけでなく、像に呪術性を認める傾向が強いという点で注目に値するアルプス周辺の聖像についても同様の調査を行い、像の力を持続させたり再活性化させたりするためのさまざまな処理や論理を確認した。その成果は、博士論文および著書の一部に公表した。

本研究では、こうした研究成果をふまえたうえで、さらに分析事例を増やし、ルネサンスの修復の論理がいかなるものであったのかを考察した。なかでも注目したのは、当時の最先端の芸術刷新からは距離をおき、伝統的な様式や技法を墨守して制作に打ち込んでいた（それゆえに従来の美術史学において言及されることの少ない）芸術家たちが、時に奇跡像の修復や複製制作に深く関わっていたという点である。フィレンツェのサンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂の奇跡を生む聖母像の複製を数多く手がけたヤコポ・ディ・チオーネ、祖父の代から伝統的な工房を継承し、奇跡像の修復を行ったネーリ・ディ・ビッチ、さらにローマの聖ルカ伝説と関わる数々の聖母像のコピーを受注したアントニオ・アッツォ・ロマーノといった画家たちの活動を、奇跡像との関連という新たな視座のもとで再考した。あわせて、「美的要素」と「宗教的要素」、「古い様式」と「新しい様式」とが、奇跡像という次元でどのような関係にあったのか、また、複製制作においてオリジナルの力をコピーが分与されるにあたって、「類似性」や「描かれる場の同一性」など、いかなる点が聖なる力を保証する根拠として機能したのかについても、あらためて考察した。さらに、サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂の名高い奇跡像の数多くのコピーのなかでも、プラートのサンタ・マリア・デッラ・カリタ聖堂のものは、タッデオ・ガッディというフィレンツェの画家の様式を保守することで、礼拝価値だけでなく、政治的にもプラートに対するフィレンツェの支配を視覚的に象徴するよう機能したという点にも視野を拓くに至った。複製や様式が、芸術的価値だけではとらえがたい意味や機能を帯びていたことは、今後、さらに掘り下げていくべき課題である。

(3) 奇跡像の崇敬をプロモートしたり、それに参与した当時の人々の心性についても考察を行った。一見、民衆的で低い文化に属するように思われる像崇敬が、さまざまな社

会的階層においてどのように体験されていたのかをとくに問題とした。年代記作者フランコ・サッケッティが、次々と移り変わるフィレンツェ人の聖母像崇敬の流行を、迷信的な民衆の愚考として嘆いた一節はよく知られている。しかしそうした現象は、ひとえに民衆層の自発的行為というよりも、もっぱら在俗信徒会や修道院などのプロパガンダや都市政府の意向と密接に結びついていた。時には、像を用いた呪術的な儀礼が、高位聖職者や貴族層の庇護のもとに公式に催されていたことにも目を向け、当時の芸術庇護の一面を明らかにした。

主として取り上げたのは、ラファエッロの手になる教皇ユリウス二世の肖像と、ローマのサンタ・マリア・デル・ポポロ聖堂にある聖ルカの聖母を用いた16世紀の儀礼である。教皇ユリウス二世の意向により、この伝統的な崇敬像と、ラファエッロの手になる肖像および聖母像とが組み合わせられて、「真正」とされるサンクト・サンクトールム礼拝堂の《救世主像》とサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂の《聖母子》の古くからの像儀礼を模した演出が行われた記録があり、「崇敬」像とラファエッロの「芸術」とが交錯する儀礼として考察の対象とした。そこでは、次第に像の「奇跡力」以上にラファエッロの「芸術的技巧」を目にするために巡礼者が集まりはじめるという価値の転換も認めることができた。

また、ルネサンス期に固有の礼拝像として注目したのが、プロフィールのキリスト像である。古代ローマ皇帝の肖像形式の一つであるプロフィールのメダルという肖像形式をキリストに応用した作例は、15世紀半ばにフェッラーラの宮廷周辺で、おそらくアルベルティなどの人文主義的思想に鼓舞されて、マッテオ・デ・パスティやピサネッロなどにより制作されはじめる。しかしそれらとは別に、1500年前後に、より無骨な個別性を刻むキリストのプロフィール肖像の系譜が生まれ、アルプスの北でも南でも普及をみた。その系譜において、肖像は、キリストがまだ存命中に製造されビザンツ皇帝が保管してきたというエメラルド肖像の伝承や、古代ローマの架空の執政官プブリウス・レントゥルスの偽文書に記されたキリストの「真の」外観と結びつけられ、「古代性」「真正性」が主張されていった。ルネサンスに生まれた「新たな」キリストの肖像に、キリスト教古代の威光や真正性を付与することで、「古物」をいわば「捏造」していく経緯が、まさに文献学、カメオなどの古物蒐集趣味といった道具立てとともに、ルネサンス人文主義のただなかで展開されたことが浮き彫りとなった。この研究成

果については、現在執筆中の著作において公開を予定している。

いずれのケース・スタディにおいても、従来のアイコンや聖像に関する伝統的な研究成果を踏まえ、それを批判的に継承しつつも、その方法論的可能性に期待が集まる「イメージ人類学」的視点を加味しながら多角的な考察を試みた。時にイメージの力をめぐる研究は、「奇跡像」という自律した非歴史のカテゴリーを想定しがちであり、文化や時代を超えた安易な比較に陥るきらいがある。研究代表者は、中世末から近世初頭のイタリアにあえて時代を限定して、この問題を厳密に歴史的な文脈のなかに措定することで、こうした難を回避し、当時の図像・文書史料の解読に基づいた徹底した実証的態度を堅持しつつ、方法論上の可能性を提示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- (1) 水野千依、「パオロ・ヴェロネーゼの異端審問調書(原典資料紹介)」、『西洋美術研究』、査読なし、No. 16、2012年、pp. 176~189
- (2) 水野千依、「聖母のマントとキリストの異性装」、『服飾文化共同研究最終報告 2010(電子版)』、査読なし、2012年、pp. 27-52
- (3) 水野千依、「ルネサンスの図像における奇跡・分身・予言——イメージ人類学的視座から」、査読あり、博士学位論文(京都大学、人間環境学)、2010年
- (4) 水野千依、「ルネサンスの奉納像——〈痕跡〉と〈分配されたパーソン〉」、『美術フォーラム 21』、査読なし、Vol. 20、2009年、pp. 101~108

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

- (1) 水野千依、名古屋大学出版会、『イメージの地層——ルネサンスの図像文化における奇跡・分身・予言』、2011年、901頁

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

翻訳論文

(1) ジャン＝クロード・レーベンシュティン、「場違い」、『西洋美術研究』、Vol. 16、2012年、pp. 37-64

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水野 千依 (MIZUNO CHIYORI)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：40330055

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：